

フライイングの修行」

愛甲次郎

修行には祕すべきこと多し。これより述ぶるところも恐らく些か開示の禁に觸れるところあるべし。されど老いて先の短きを思へば今書き遺さずばあらじとて敢へて要點のみを此處に記す。

一九九〇年夏蓼科の山中のホテルにて開催せられたる五日間のフライイングの合宿講習に参加せり。そはマントラ瞑想の上級コースなりき。

瞑想の目標は思考作用を止め無念無想の境地を實現するにあり。人は覺醒する限りもの思はざること能はずして思考作用を止むるには技術を要す。古人意識を一定の對象に集中し之を長く續くるにおいて自づと無念無想の境地達成せらるるを悟れり。古來インドにて廣く行はれし集中法は單純なる音を間斷なく聽覺中樞に與ふる方法なり。この單純なる音をマントラと呼び、マントラを利用せる瞑想法をマントラ瞑想法と言ふ。

フライイングとは、深き瞑想の中にてある種の呪文を唱ふることにより、胡坐を組み坐したる姿勢のまま空中に跳ね上がる技の謂にして、マントラ瞑想完成の域に達せることを要件とす。

合宿中は菜食、禁酒禁煙、コーヒー等も不可、新聞、テレビ、電話等も許されず。午前中は個室にてひたすら瞑想、午後地下の會場に移り、講習を受く。

講習を受くるは男女それぞれ二十五人宛、牀にはマット敷き詰められ、照明はほの暗し。全員胡坐を組み、指示の通り複雑なる過程を経て深き瞑想に入る。深き瞑想に入るや豫て習ひ覺えたる呪文を心のうちに唱ふ。俄かに尾骶骨の下にふつふつとエネルギーの生ずるを感じ、やがて全身に激しき震動を覺ゆ。とんとんとマット打つ音に惹かれ薄目を開くれば照明消えて薄暗き中胡坐を組みたるまま蛙の如く跳ぶ姿を見る。初日我は何事もなく講習を終へぬ。

三日目に至り呪文後の震動の際、幻のうちに白き馬の周りを巡るを見る。予馬に飛乗らんとするも果たせず。やがて尾骶骨の下より火山の火柱吹上げ、予の背骨を包み空に立昇る。

氣が附けば予は座布團より落ち、牀に轉倒したるなり。指導員來たりて耳打ちして言ふ様、「愛甲さん、三回跳びましたね」。これ予が最初のフライイングなり。その後のフライイングは全て意識を伴ひ、胡坐を組みたるままホッピングを爲す。予はクラスの三番手なりき。五日の講習終はりて女子参加者のほぼ全員、男子の半数、フライイングに成功す。

山を下りて茅野の驛前にてカツライズとコーヒーを取りたる解放感、未だ忘れず。歸宅後フライイング予の日課となる。フライイングは完璧なる瞑想の證左なり。腰の骨折を避くるため厚さ二十センチ程のポリウレタンのマットを特注し、その上にて修行す。二階の寢室にて修行するに、フライイングの姿を他人に見せざること講習の條件なれば、家内は常に一階にて音のみを聞く。

當時ほぼ月一回海外出張に出でたれば、ホテルのベッドにてフライイングを爲すこと數限りなし。概ねスプリング利き、快適にして、しかも鏡附きにて姿勢を匡すこと容易なり。

下北澤にて毎日曜日フライイングの練習會ありてしばしば之に参加す。會にて最も優秀なる跳び手はさる電器メーカーのエンジニアにして、優に二メートルは跳ぶを常とせり。先達に依れば我らの到達せるはホッピングの段階にして、いづれ羽の如くふはりと落つるやうになり、更に進まば短き間なりとも空中に留まることとなる。之フローティングの段階なり。次いでそれより横に移るを得ば、これぞ眞のフライイングなりと。アイオワ州のマハリシ大學には多くのフライヤーありと言ふ。

數年後激しき椎間板ヘルニアの發作に襲はれ、それより跳ぶことを得ずなりにけるはいと可惜し。

（平成二十八年九月二十九日受附）